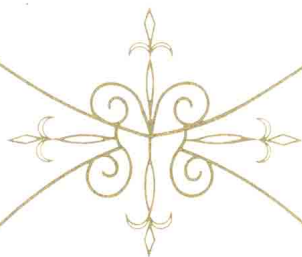


三島由紀夫
全集



8

三島由紀夫全集



8

VIII

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳
編纂／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新 潮 社

三島由紀夫全集第八卷

昭和四十九年九月二十日印刷

昭和四十九年九月二十五日発行

著者三島由紀夫

発行者佐藤亮一

装幀者杉山寧

三島由紀夫

発行者株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七二 振替東京八〇八

電話業務部(〇三)二六六―五一一 編集部二六六―五四一一

定価二五〇〇円

第十七回配本(全35巻・補巻1)

Copyright © 1974 YÔKO HIRAKOKA Tokyo Japan

三島由紀夫全集 第八卷 目次

戀の都		七
陽氣な戀人		二四
藝術狐		二八一
S・O・S		三〇三
屋根を歩む		三五
幸福號出帆		三三七
解題		六五
校訂		六六

三島由紀夫全集 第八卷 小説 (8)

戀
の
都

白檀の扇

この物語をはじめに當つて、讀者諸姉にちよつとした記憶を強制しなければならないことは、作者として、若干、遺憾とするところである。自由を愛する作者は、強制をきらふ點においても、人後に落ちないからである。

といふのは、些細な一本の白檀の扇についてなのだ。

この扇は、かうして物語のはじめに、一寸紹介ちよつとされるだけで、物語がをはりに近づくまで、姿を現はさない。

そこで讀者は、この扇が姿を現はしたら、物語がそろそろをはりに近づいたと考へていただきたい。一方、この扇が姿を現はさないうちは（途中で何度あくびを連發されても）、話はまだ當分をはらないものと覺悟していただいてよい。

扇といふのは、白檀の三十の薄片に、精巧な透かし彫を施したものを、白絹のリボンで綴り、白銀の要かなめでとめたもので、手にとれば、全部木製でありながら、日本の舞扇よりもはるかに軽く、いかにも佳人の纖手にふさはしい。

しかもあふがれるとき、ほとんどしなふかと思はれる扇の薄い木片が立てる風は、白檀の優雅なもののさびた薫りを運んでくるのである。

最近香港からかへつたアメリカX通信社の政治記者ドナルド・ハンティントンは、日本のある女性に手渡すやうに、ある人から託されたこの香港の扇を、自分のホテルの鏡臺の上に置いておいた。

その女性が一向見つからなかつたからである。

ドナルドの部屋には、日本人の女性の訪客がまれではなく、ある女は、鏡臺の上に置かれたこのかぐはしい扇に嫉妬を抱き、ある女は魅力を感じて、ほしがつた。ドナルドは決して與へずに、これを手渡すべき日本女性の名をきいた。誰も知らなかつた。

それは梅雨の一日の、憂鬱な日曜日であつた。

ドナルドは土曜の晩の呑みすぎと睡眠不足を、晝寢をしてとりかへさうと、シャツとズボンの姿で、宿舍のNホテルの一角のベッドの上にごろりと横になつた。

何の氣なしに、手にはいつも鏡臺の上に置きつばなしになつてゐる扇をもつてゐて、寝ころんだ顔の上で、この厄介な扇をひらいたり、とざしたりした。彼はアメリカ人によくある少し上向きかげんの愛嬌のある鼻を、ひらいた扇に近づけた。

えもいはれぬ東洋の匂ひがした。甘くて、莊嚴で、暗い……。

それから扇をとざして、枕もとのナイト・テーブルの上におくと、毛むくぢやらの兩手を頭のうしろに組んだ。

『どうして眠れないのかなあ……』

彼は、降りさうで降らない、どんよりした窓のけしきを見た。少しむしあつく、まだ冷房はないので、窓は半分上げてあつた。

『ああ、あいつのせゐだ。まつ晝間からダンスだなんて！』

彼は舌打ちして、猛獸のやうに荒々しく起き上り、窓を下ろしにゆくついでに、今彼が自分の眠られぬ原因をそこに發見した、窓からもれてくる、かすかだがしつこいダンス音楽の源である、街路ひとつへだてたむかうの三階建の古い洋館をちらりと見た。

都心にはめづらしい、古風な石造の低い建物である。しかも前には、曇り空の下に煤煙によごれたヒマラヤ杉をならべてゐる前庭を控へ、前庭には古風な鐵柵と石の門がついてゐる。

ドナルドは、いきほよく窓を下ろし、ブラインドをガラリと引き、それから、ベッドに猛然ととびかへつた。ベッドのスプリングの震動がをさまるころは、ドナルドは半ば眠つてゐた。

……

人物紹介

……ジャズ音楽はそれほどやかましくNホテルの窓々をおびやかしてゐるわけではなかつた。ホテルと古風な三階建の洋館との間には、たえず自動車の往來してゐる街路があり、自動車のクラクションの響は、兩側のビル街にたえず反響してゐた。それを縫つて、たまたま、むかうの三階のジャズ音楽が、こちらのホテルの三階に、前庭と街路をへだてて、波打つてくるだけだつた。

古風な洋館の門には、ARMY CLUBといふイルミネーションがかかつてをり、そこを米國兵が、窓から洩れる音楽に口笛を合はせながら、くぐつて行つた。

三階の窓々は、すっかり開け放たれ、それでも曇り空のために仄暗い内部の大ホールには、天井から吊り下げられたダイヤライトを照らすスポット・ライトのほかに、照明らしいものは何もなかつた。五色の折紙を小さく刻んで散らしたやうに、ダイヤライトの光りは、うごめいてゐるダンスの人々の群の上をすばやくめぐつてゐた。テーブルの上にぼつねんと置かれてゐる白革のハンドバッグをその赤や黄や緑や紫の小さい光りの破片が染めてすぎた。

朝鮮がへりのGIたちは、日本人の令嬢を、アメリカ人の看護婦を、日本人のあの外貨獲得の功勞者の女たちを抱いて、うつとりと踊つてゐる。

一隅の樂團の舞臺は、一つ一つの楕形たがたの譜面臺を光りに浮き出させてゐる。樂團シルバ・ビーチの人たちである。六人編成のコンボ・スタイルの小バンド、バンド・マスターの坂口は、テナー・サクスを手にして片手で指揮をしながら、自分のパートに來ると、そのサキソフォンのきららした金屬の管を、踊つてゐる人々の頭上に向けて吹きならした。

坂口は四十がらみの、肥つた、いかにも肺活量の大きな男で、淺黒い丸顔にコールマン髭をたくはへてゐる。その甘いテナー・サクスの音と反對に、おそろしくガラガラ聲の男だ。吹いてゐる時の彼の顔は、風船を一生けんめいふくらましてゐる鼻はなといふ感じで、愛嬌があつた。

彼はほとんど立ちつばなしだが、ハイブラフォンフクロン（手風琴にモーターのついたもの）の本多はじめ、あとの五人は皆坐つてゐる。本多は三十を越したばかりで、すつかり禿げてゐる。無類のお人よしで、宣傳飛行機が女の下着を撒いて飛んでゐると言へば、本氣で窓から首を出しかねない男である。

あとの四人はみんな二十代の半ばまでの若者だつた。ピアノの松原は、白い纖細な手を、まるで紡績女工のやうにめまぐるしく働かせて、象牙の鍵盤にむかつてゐた。彼はすんなりして蒼白く、大人しい美男子だつた。

ギターの石川は、ニキビだらけの、呑氣な若者で、この世に面白くないことは何一つないといふ顔つきをしてゐた。ベースの織田は、大きな樂器を、しじゆう眠さうな目つきで所在なげに抱いて、絃を弾いてゐた。

ドラムの工藤は、奥の一段高いところで、小さきまぎまの太鼓の夜店をひらいたやうな恰好で、ややうつむき加減に、すばらしいテンポで連打した。彼の日頃の鋭い引締つた顔は、額にかかつ

たほつれ毛と共に、いつそう鋭く尖つてみえた。目は血走り、はげしいドラムの擦打のパートになると、きいてゐる胸が轟いてくるやうであつた。ほかの樂團員は、微笑しながら、たのしげに體をゆすりながら演奏してゐるのに、彼ばかりは人を殺しかねない表情をしてゐた。

大ぜいの軍服の兵隊にまじつて、一人の平服の若いアメリカ人が日本人の女と踊つてゐた。女は品のよいお嬢さんで、無表情な怒つたやうな顔をして踊つてゐるが、パートナーが耳もとでささやくと、ふいにいきいきした目と微笑の齒がきらめいた。それがまた、瞬時に、固いものうげな表情に立戻つた。耳には金の薄片の細工の耳飾りがきらきらしてゐる。顔ぢゆうのほんのりしたお化粧に、小さい口だけが紅が濃い。白いなめらかな腕は、まるで無表情に、男の金髪のうなじに巻かれてゐた。……そして彼女は自分をじつと追つてゐる工藤の目を感じて、バンドのはうをつとめて見ないやうにしてゐた。

工藤の太鼓の連打がはげしくなる。

アメリカ人とお嬢さんの一組は踊りの群にまぎれてしまふ。シルバ・ビーチの交替前の最後のクイック・ステップがをはつた時、工藤の額には汗が粒立つてゐた。

……バンドが交替して、西部音樂のバンドに入れかはる。西部劇に出てくるやうな牧童の装ひをして、額に色とりどりのスカーフを巻いた次の樂團員に、シルバ・ビーチの樂團員たちは、軽く會釋をしながら、樂屋へいそいだ。

樂屋は大ホールに接した十坪ほどの應接間であつた。椅子やテーブルがぞんざいに置かれ、樂器入れの黒いケースが壁に立てかけてある。テーブルの上にギターがのせてある。それから亂暴に二つづつ穴をあけて、誰でも呑めるやうにしてあるアメリカ製の罐詰ビール、アメリカ煙草の